

**LANGUAGE
AND SILENCE
GEORGE STEINER**

言語と沈黙

上

G・スタイナー

由良君美他訳

せりか書房

**LANGUAGE
AND SILENCE
GEORGE STEINER**

言語と沈黙

上

G・スタイナー

由良君美他訳

せりか書房

言語と沈黙 上

定価 1,500 円

1969年12月15日発行

著 者 ジョージ・スタイナー

訳 者 由良君美 他

発行者 菅原 敏

発行所 株式会社せりか書房

東京都文京区後楽2・20・15 内野ビル 電話 813 : 8566~7 振替 東京 14360

本文印刷 株式会社厚德社

装本印刷 松本印刷株式会社

製本 神田錦町橋本製本

装幀 平野甲賀

1969 ©

日本の読者に

この短かい序文は、まだ見ぬ友にむかって書いている手紙のような気がする。まだ相見たことはないが、その存在を強く実感している友への。

わたしはまだ、日本の土を踏んだことがない。日本文学にたいするわたしの知識も、日本語がまるで分らない者の持つ、貧しい性質の知識にすぎない。この無知をわたしは恥かしく思う。いつの日にか、たとえ片言かたことの程度にでも、この無知を改めたいと願っている。

これに反して、わたしの仕事に関心を持って下さった日本のかたがた、わたしの仕事を邦訳する労をとって下さったかたがた、わたしの著書や小論について手紙をくださったかたがた——こ

それらのかたがたが示された英語能力には、わが身の至らなさを、深く恥じ入らせるものがあつた。わたしと連絡をつけるため、これらのかたがたは、そちら側から橋を架け、自力でここまで、一気に渡つてこられた。わたしはといえば、こちらの岸に立ちつくし、ひたすら待つてゐるほかに仕方がなかつたのである。

わたしの営みの全体は、ひとつのパラドクスに根ざしており、そのパラドクスは、わたしには深く怖るべきものにみえる。二〇世紀の大きな野蛮行為、つまり強制収容所・核兵器の使用・幾百万という人間にたいする政治的抑圧——これらの現象が、高度の文明をもつところや社会から躍りてきたというパラドクスである。ゲーテの世界もアウシュヴィッツを阻む力はなかつた。ラザフォードやアインシュタインの天才も、なにほどこか、あの広島の煉獄に力を貸してしまつた。文明そのものは、いったいどんなふうに、究極の非人間性と結びつてゐるのだろうか。産業社会の大衆の、新しい半可通の教養もさることながら、それに加えて、高度の文明が深い形而上学的社会的アンニユイを培い、このアンニユイが否応なしに、全体主義的な幻想と戦争にむかつて爆発したのではないだろうか。精神の抽象的訓練・近代のVの基礎にある知的客観性の訓練、この訓練が、なにかの意味で、われわれの感受性を非人間的なものにし、具体的な需要と可能性を把握してゆく能力を、なくさせてしまつたのではないだろうか。ハムレットやモーツァル

トに涙するように教育された人は、隣家でおこった人間的絶望に起因する、ありふれた混乱した暴力行為にたいして涙する能力を、鈍磨させられ、喪失させられているのではないだろうか。

わたしの処女作『トルストイかドストイェフスキーか』のなかで、現代文学批評が哲学的宗教的なかたちでの想像力をとりおとしてしまっていること・この欠落が大文学の大半との接触を断たせてしまっていることを、わたしは論じた。『悲劇の終焉』では、ラシーヌとクライストののち、悲劇的演劇は衰退したということを中心に、この論旨をもう一步おしすすめてみた。つづいてわたしは、死ならびに神の現前についての若干の隠喩が、西ヨーロッパの想像力には、もはや昔のように分らなくなってしまったか、少なくともこれらの隠喩自体が変ってしまったということを示そうと努めてみた。短篇集『主の年』では、一九四〇年から四四年に舞台をとった三つの挿話をとりあげて、神が一時そこから不在になった世界、ある神秘的賭から、神が一時的に背をむけてしまった世界のことを想像してみた。この小説集も、いつかは日本訳がでることを望みたい。

以上にわたしの関心は、すべて『言語と沈黙』のなかにきわめてはっきりと働いている。文明が野蛮行為にたいしてもつ責任についてのわたしの告発、非人間的なものにかんするわたしの仮定が、本書の主論文のなかに十分に展開されているのを、読者はごらんになるであろう。人

文教育の孕む問題を、文学研究も文学批評も把握しそなっていることにたいする、もつと特殊な考慮も、読者はごらんになるであろう。数篇の小論が、とくに、ドイツの知的生活の悲劇と、芸術と文学にかんする若干のマルクス主義的モデルのなかに例証されているラディカルなヒューマニズムとを扱っているのも、以上のことを考えてのことである。

本書の題そのものからして、ひとつの新しい焦点を示している。言語現象そのものこそ、考え直されねばならないということを、わたしは、ますます強く確信するようになっていく。言語こそは人間を規定する特徴であり、世界にたいする人間の交渉は、その核心において、言語的なものであると、いまや、わたしは考えるようになっていく。マルクスもフロイトも、ともに、△コトバ▽の偉大な建築家であり、人間の条件の複合体のまわりに、△言葉の殿堂▽を築くことで、この複合体をわがものにしようとした人びとだと、わたしには思えるのである。いまや、言語学的・人類的・哲学的・数学的な言語探究こそ、人間の思考の中心そのものである。だが、ここでもまた、伝統的な文学研究や文学批評は、おくれをとっている。ここから、わたしとしては、本書に収められている小論が、言語の眞の哲学へとむかうささやかな端緒を与えてくれることを願うものである——あるいは、コールリッジによって、またはドイツの哲学者Ⅱ批評家ヴァルター・ベンヤミンによって手をつけられながら、断片のままに終った仕事をもういちどとりあげる試みを与えてくれることを。

日本でも、このような問題や感覚が、活発に持たれていることを、わたしは知っている。わたしの書物が、文明と暴力・芸術と蛮行にたいする日本的考察にたいして、なにほどかの足しになるとすれば、わたしはもって冥すべしであろう。たとえ遙か遠方からのものであり、またわたしが日本語を解さないという障壁を飛びこえて頂かねばならぬものであろうと、わたしは、本書にたいする反響（こだま）を期して待つものである。なぜなら、こだまのないところ、いかなる声も消え去るほかはないからである。

ジョージ・スタイナー

一九六九年八月 ケンブリッジにて

（由良君美 訳）

言語と沈黙

上巻

目次

言語と沈黙 上

日本の読者に

はしがき——— 7

人文教養

人間をまもる読書——— 19

言葉からの退却——— 35

沈黙と詩人——— 83

英国紳士の教化のために △英文科▽はこれでいいのか——— 123

夜の言葉 高級好色文学と人間のプライヴァシー——— 151

ピタゴラス的ジャンル エルンスト・プロッホ生誕七十五年を記念しての憶説——— 173

闇からの言語

空洞の奇蹟 ————— 203

ギュンター・グラスに関する覚え書き ————— 236

K ————— 254

シェーンベルクの『モーセとアロン』 ————— 275

ある意味での生きのこり エリ・ヴィーゼルに ————— 301

ある意味での生きのこり・補遺 ————— 333

古典

ホメーロスと学者たち ————— 363

聖書 ————— 403

シェイクスピア生誕四〇〇年祭 ————— 429

翻訳二篇 ————— 459

言語と沈黙 下巻

巨匠たち

F・R・リーヴィス

神話をたずさえるオルペウスクロード・レヴ

イラストロース

マーシャル・マクルーハンを読むには

小説と現在

絹のジャングル 谷崎潤一郎の『鍵』

陰影と細心 サミュエル・ベケット

屠殺の使徒 セリース

メリメ

トーマス・マンの『フェーリクス・クルル』

ロレンス・ダレルとバロック小説

モニユメントの建立

死ぬことも一つの芸術

マルクス主義と文学

マルクス主義と文学評論家

ジェルジ・ルカーチと悪魔の契約

美的共産党宣言

中央ヨーロッパから離れて

作家と共産主義

トロツキーと悲劇的想像力

文学と「歴史の終熄」以後

訳者あとがき

索引

言語と沈黙
上巻

はしがき

なによりもまず、本書は言語について考察した書物である。言語と政治について、言語と文学の未来について、全体主義の虚偽と文化の凋落とが言語に及ぼす圧力について、言語と他の入意味コードV（音楽、翻訳、数学）について、言語と沈黙について、考察した書物である。

ここに集めた小論や論説は、いろいろ異なった時期に書かれた。たいていの場合、特定の機会に応じて書かれたもので、ある本が出版されたのを機会に、ある戯曲やオペラの上演を機会に、ある政治的事件を機会に、書きつがれてきたものだ。そうは言っても、これらの諸論の基底には、われわれの社会と文化における言語の生命、言葉のもつ複合的なさまざまなエネルギーのうちの若干がもつ生命——これを考察しようというテーマが、一貫して流れている。いったい、二、三

の全体主義体制において公然と表明させられたり聖化させられたりした、あの悪虐非道の虚偽にたいして、言語はどういうつながりを持っているのか。また大衆デモクラシーにおいて背負わされてゐる莫大な卑俗・不正確・貪欲という重荷にたいして、言語はどういうつながりをもっているのか。数学や記号的表記法のような、もっと正確な表現法が欲しいという、ますます火急になり広汎になる要求にたいして、言語——それも、日常有効な関係を表現する一般的慣用語という伝統的な意味での言語——は、いかに答えてゆくであろうか。かつて言語が優位を占めていた歴史上の時期から、教養ある表現をもっていた古典時代から、いまやわれわれは、墮落言語の時代相・△言語以後▽の形態の時代相・おそらく部分的沈黙の時代相へと、移行しつつあるのではなからうか。以上の問いこそ、以下の試論において、わたくしが提起し、焦点を合わせてみようとするものである。

これらの問いの背後には、文学批評——とりわけ現代のようなアカデミックな批評との押れあい共存の状態にある文学批評は、非常に有意義な行ない、ないし責任ある行ないではもはやないのだ、という信念がある。あまりにも多くの文学批評が、一九世紀に展開されたアカデミックな価値観またはジャーナリスティックな価値観の安逸さと叙述習慣とを身につけている。△書物について書いた書物▽や、いまでこそ隆盛でも比較的最近のジャンルである△文学批評についての書物▽（これでは原物から三重に距てられていることになる）などが、もちろん、今後とも、多

数注ぎだされつづけることは疑いあるまい。だが、それらの大半が一種の入門的スポーツにすぎないことも、明らかになりつつある。また人文諸科学と現在の歴史のすがたとの間に、文学的コミュニケーションの観念と現在の歴史のすがたとの間に、いったいどういう共存と交互作用が可能なのか。この問いを問いたい人たちには、 \wedge 書物について書いた書物 \vee だの \wedge 文学批評についての書物 \vee などは、ほとんど答えるものを持たないことも、これまた明らかになりつつある。一方におけるアカデミックな純文学尊重と、他方におけるわれわれの実生活のなかでの文学のもつ意味の下落や実生活のなかでの文学の滅亡と、この尊重と下落との間の落差は、キェルケゴールが最初にこの落差の反語的な幅を教えて以来、ほとんど変わっていないのだ。

現代批評のなかで、もつとも活力あるもの、すなわち、ジェルジ・ルカーチの批評、ヴァルター・ベンヤミンの批評、エドマンド・ウイルソンの批評、F・R・リーヴィスの批評は、この点こそ問題であることを心得ている。これらの批評家はそれぞれに、独自の個性的視角から、文学的判断というものを社会批評とみなし、事実と人間行為の可能性をユートピア的に比較するか経験的に比較することが文学批評であるとみなした。ところが、その彼らの鴻業でさえも、(また以下の本書の本文の大半が、明らかに彼らの鴻業に負うものではあるが)すでに過去のものにみえつつある。彼らの鴻業からして、いまや疑問を投げかけられている \wedge 文字中心の教養 \vee という狭い制約から生れたものなのだ。